

2022年3月期第2四半期決算説明会（WEB説明会） 質疑応答議事録

日時 2021年11月18日（木） 10:30～11:30

説明者 代表取締役社長 吉貴 寛良

取締役 執行役員 経理・財務本部長 大橋 二三夫

Q1. 下期の売上高は大きく回復する見通しだが、トヨタの国内生産台数はどのような見通し、前提でいるか？

A1. 国内生産台数は300万台の前提にて、弊社の計画を策定している。
トヨタの生産が計画通りにいくか不透明な部分はあるが、しっかり追従していきたい。

Q2. 第4Qにかけて増産となる予定だが、これに対する対応と追加コストはどうか？

A2. 各OEMから増産計画が出ているため、増産対応できるように人員配置および人員確保の準備をしている。また、そこに掛かるコストは下期見通しにある程度は織り込んでいる。

Q3. 売上高と限界利益率（資料28ページ）について、短期的にこの水準が続くのか？

A3. 過去に生産開始されていた低収益の車種が順次モデルチェンジされ、新たに2018年以降に生産開始されたモデルのように、高水準の利益率を確保できる構造に変わってきていると考えていただきたい。

Q4. 中期的にもこの水準が維持されるのか。また、これにも増して更なる計画があるのか？

A4. まずは、新5ヵ年計画で目標としていた営業利益率3.5%を安定的に確保していく考えであり、今後計画されているプロジェクトにおいても、引き続き確実に利益率を確保できるように取り組んでいる。

Q5. ボデー系商品の新たなビジネスモデル（資料40ページ）の取組みの時間軸、それによる利益率、付加価値はどのような変化を期待すればよいか？

A5. すぐにこのビジネスモデルに切り替わるということではない。従来はボデー開発をしていないため、能力構築から着手しているが、ボデー溶接設備設計のノウハウとボデー設計を併せて提案することで差別化を図る。

- Q6. 一時ホットスタンプへの注目度が高かったが、今後冷間超ハイテンとのバランスの変化はあるか？
- A6. ホットスタンプが大量の電力を使用することは事実であり、現在の環境下では逆風が吹いている。よって、現在はホットスタンプでしか作れない部品を冷間超ハイテンで作れるようにしてお客様へ提案し、競争力の強化に繋げていきたい。
- Q7. CO2削減（資料45ページ）にどのように取り組んでいくのか？
- A7. 弊社独自の取組みがある訳ではない。大きな所では、重油での自家発電を外部購入の電気へと切り替えていく。トヨタから取組みに関する「6つの着眼点」もいただいているため、それに基づき進めていく。
- Q8. ボデーのアルミ化は進むのか？
- A8. アルミも多くの電力を使用するため、材料置換ではなく、鉄の特性をうまく利用し、鉄を使い切っていきたい。
- Q9. 製品別売上構成比率（資料32ページ）で、排気系、ボデー系の利益率の改善はどうか？
- A9. 新5ヶ年計画での取組み以降、排気系部品の利益率も改善はしているが、改善率で比較するとボデー系部品の改善の方が大きくなっている。

以上